

「不請の阿弥陀仏」私考

沼 波 政 保

はじめに

「ゆく河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず」で始まる『方丈記』は、今さら指摘するまでもなく、見事な構成を持ち、名文で綴られている。川合社の禰宜になれなかったことからの一時の感情によって出奔した長明は、仏道一筋に生きることはできず、知識人としての立場を捨て去ることが出来なかった。その彼が、自らの名を後代に残さんがために著した『方丈記』。『方丈記』脱稿後はともかく、少なくとも執筆前には、このような気持ちも多分にあったといつてよからう。従って、『方丈記』が名文で綴られていることも、またその構成が見事であることも当然のことではある。

人と栖を中心に無常の理を説き、そして無常の実例を挙げ、そのような煩しい俗世を離れ、閑居の生活こそ精神の自由があるとす。悠々自適の生活のすばらしさは、「住まずして、誰かさたらん」と高らかに言い切るほどのものであった。しかし、そこまで誇らかに語った後、ふと見上げると月は西に傾いている。その月と同様、自分

の余命もいくばくもない。その自分が草庵に執着しているとは、仏道修行どころか仏の教えに背いているではないか。自ら問い正していった結果、長明は「不請の阿弥陀仏」を両三遍唱えて黙ってしまっしかなかった。

以上の内容を持つ『方丈記』であるが、末尾の「不請の阿弥陀仏」をどう解釈するかが従来から問題になっており、またその解釈が『方丈記』の評価にも関わっている。そこで、拙稿では、この「不請の阿弥陀仏」の解釈について、諸先覚の御論を承知しながらも、卑見を述べてみたいと思うのである。

一

「不請の阿弥陀仏」については伝本の表記に違いがある。まず、「不請」は「不愔」「不情」「不軽」「不淨」「不祥」とさまざまに表記されているが、これは山田昭全氏が言われるように、「『不請』の意味をはかりかねて、書写者の主観的解釈が入り込んでいるため」⁽²⁾であろう。「阿弥陀仏」は流布本系統で「念仏」となっているが、これは、「阿弥陀仏」が念仏を意味していることから書き換えたものと考えられ、「阿弥陀仏」を念仏と捉える点において一致しているといえよう。すなわち、問題になるのは「不請」の解釈であり、従って、この解釈をめぐって多くの先覚たちが論及しておられるが、今日まで定説が確立されていない。

この「不請の阿弥陀仏」の解釈をめぐる諸説については、築瀬一雄氏が『方丈記全注釈』・『方丈記解釈大成』において整理しておられるが、今、そのうちの『方丈記解釈大成』を参照させていただき、諸説を列挙する。

築瀬一雄氏はまず瓜生等勝氏が整理された諸説⁽³⁾を挙げられている。それによれば、

(1) 他より請はれざるに、自らすゝみてなす念仏。

(2) こちらから請い願わずとも救って下さる仏への念仏。

(3) 仏に対して何の願うところもない、心に請い求めることのない念仏。

(4) 己が心にさほど請い望まず、ただ口ずさみに念仏すること。これ心の深からぬを卑下していいしなり。

(5) 信仰の心足らず、迷いの心を離れずに唱える念仏。

(6) 「奉請」を「不請」と書きあやまったとする「奉請説」。

(7) 「不奉請説」すなわち、「奉請の儀をととのえない念仏」。

の諸説がある。築瀬氏は、この瓜生氏の整理を承けて、さらに検討を加えられた上で、あらためて諸説を次の如く掲げておられる。

(一) 不請友たる阿弥陀仏とするもの。

(二) 仏も請けざる念仏とするもの。

(三) 心に求めることなき念仏とするもの。(不請々々のとか、口さきばかりのとか、申訳だけのとか、いうのも加えた。)

(四) 他より請われざる自然的な念仏とするもの。

(五) 奉請のあやまりとするもの。

(六) 不奉請の略とするもの。

「不請の阿弥陀仏」私考

(七) 不浄または口唱(口称)とするもの。

そして築瀬氏は、瓜生氏のとられる不奉請説に従いながらも、瓜生氏が「自分にはその力がないので、その意志を断念せざるを得なかった」とされる点に疑問を呈され、同じ不奉請説に立ちながらも「長明は、仮に阿弥陀仏を請じ奉ることが儀礼としてできる財力や社会的地位をもっていたとしても、到底、請じ奉るに堪えない、心に恥ずる所があったと考えるのである」とされる神田秀夫氏とも異なり、

私見では、奉請の儀礼とはそうしたものではなく、貧僧は貧僧としての請仏の儀礼は持つべきものであり、長明はそれをさえもとのえる暇を惜しんで、阿弥陀にすがらざるをえなかった自己を述べているものと思うのである。自己を問いつめ、絶対の境地に至ったが、そこで弱気になったのでもなく、絶望したのでもなく、むしろ弥陀への帰依という一道の光明を見いだした感動をもって、筆をおいたとみるのである。⁽⁴⁾と捉えられるのである。

また、築瀬氏の整理の中にも記してあるが、山田昭全氏は、仏典及び国文中の「不請」の用例を詳細に示され、諸々の理由から仏教語として「不請」の語を捉え、その用例の意味から「不請の阿弥陀仏」を、

「愚か者(≡長明)が乞わずとも慈悲力をもって救ってくださる弥陀仏の名を兩三遍となえた」と解するのがよいと思う。⁽⁵⁾

と述べておられる。

以上、「不請の阿弥陀仏」の解釈には非常に多くの説があるが、私は、結論から言えば、築瀬氏たちと同じく不

奉請説をとりたいと思う。以下、この点について若干考察を加えたい。

二

浄土に願生し往生する行業を、天親の『浄土論』では礼拝・讚嘆・作願・觀察・廻向の五種に分ち、五念門として示されている。これを承けて、この五念門は曇鸞の『浄土論註』において他力廻向のものとして深められた。さらに善導は『法事讚』上下二巻を著し、往生浄土の行を修する法事供養の規定を明らかにされた。

善導は中国泗州の人にして、隨の煬帝の大業九年に生れ、幼にして出家し、諸宗の学を研究し、唐の貞観十九年、二十九才にして、浄土教を弘めていた道綽に出会い、浄土教を究めた。主著に『觀經四帖疏』がある。善導は在世中の唐においてはもちろん、源信僧都をはじめ、わが国の浄土教にも大きな影響を与え、最も重視された一人である。

この善導が往生浄土の行を修する法事供養の規定を明らかにしたのが、前にふれた如く『法事讚』である。その『法事讚』から、やや長文になるが引用する。

凡欲^レ為^レ自^レ欲^レ為^レ他^レ立^ニ道場^ヲ者、先^ツ須^ク嚴^ニ飾^シ堂^舎安^ニ置^シ尊^像靡^華二^ツ竟、衆^等無^レ間^ニ多^少、尺^令下^ニ洗^シ浴^シ著^ニ淨^衣、入^ニ道場^ニ聽^カ法^ヲ。若^シ欲^ニ召^シ請^ニ一^人、及^ビ和^讚者^尽立[、]大^衆令^レ坐^使二^人、先^ツ須^ク燒^香散^華、周^布一^徧、竟、然後^{依^レ法^{作^レ声^ヲ}}召^シ請^ニ云^ヘ。

般舟三昧樂願往生

大衆同心厭^ハ三^界一^無量^衆

般舟三昧樂願往生

三塗永絶^ク願^ハ無^レ名^無量^衆

三界火宅ニハシ難ニシ居止ニシ願往生

乘シテ仏願力ニケ往ニケ西方ニ無量樂

般舟三昧樂願往生

念ニシテ報シテ慈恩ヲ常頂載ニ無量樂

大衆持レテ華恭敬シテ立願往生

先請ヅ彌陀ニ入道場ニ無量樂

般舟三昧樂願往生

不レ違ニ弘願ニ心ニ時迎ニ無量樂

觀音勢至塵沙衆願往生

從レ仏乘レ華來入會ニ無量樂

般舟三昧樂願往生

觀音接レ手入ニ華台ニ無量樂

無勝莊嚴ノ釈迦ノ仏願往生

受ニ我微心ニ入道場ニ無量樂

般舟三昧樂願往生

碎キテ身ヲ慙謝ス釈迦ノ恩ヲ無量樂

彼国ノ莊嚴大海衆願往生

從レ仏乘レ華來入會ニ無量樂

(以下略)⁽⁶⁾

すなわち、自他の為に法事を修することであることを示した後具体的に示す。まず道場を嚴飾して身衣を淨くする。次に仏前に進み焼香散華して座にもどって、「般舟三昧樂」以下の文を唱えるというわけである。

讚文は「先請ヅ彌陀ニ入道場ニ」と阿弥陀仏を奉請し、以下、觀音・勢至をはじめ、釈迦、諸仏、二十五菩薩、さらにそれらの徒衆まで奉請するのである。

つまり、法事を修するにあたって、まず阿弥陀仏等を奉請するのが、その作法である。しかも、それが、中国・日本の淨土教に多大な影響を与えた善導によって示されているのである。当然ながら、この行儀は、阿弥陀仏を信じ、極樂淨土への往生を願う淨土教において、法事の行儀の冒頭のものとして行なわれるのである。しかも、『法

『事讃』に規定するにあたって善導は「諸経の通説を採用されたやうであって、かの唐朝以前の古師の先例を尊重して、これに則ったものが多いやうであ」り、その点からいえば、この『法事讃』に規定する行儀の影響は広汎であると考えられるのである。

三

今、長明在世の頃の法事の行儀を知る術を知らないが、現在行なわれているそれを検してみることにする。

天台宗では、結婚式の作法にしか見出しえなかったが、天台宗における結婚式の次第は、「鳴鐘」・「入堂」の後、「一心頂礼十方法界常住仏 一心頂礼十方法界常住僧」の「三礼」をし、次に、仏・菩薩等に道場に降臨されんことを請願する「勧請」を行なう。その際に唱えるのは次の如くである。

- 一心奉請大恩教主釈迦牟尼仏
- 一心奉請東方教主藥師琉璃光仏
- 一心奉請西方教主阿弥陀仏
- 一心奉請十方法界常住仏
- 一心奉請妙蓮華真浄法門
- 一心奉請十方法界常住法
- 一心奉請円宗守護日吉権現

「不請の阿弥陀仏」私考

一心奉請高祖天台智者大師

一心奉請宗祖根本伝教大師

一心奉請十方法界常住僧

そして、「啓白」・「結婚者礼拝」へと続くのである。

日蓮宗では、在家勤行式・結婚式・葬儀に「奉請」もしくは「勧請」がみられる。在家の勤行においては最初に

唯願法界海

諸仏諸賢聖

哀愍垂降臨

莊嚴此道場

唯願我等輩

身心俱清淨

三業徧智修

成就如来事

唯願衆功德

回向悉周徧

此界及十方

利益不唐捐

と諸仏諸賢聖の道場への降臨を「奉請」する。そして「三宝礼」をなし、さらに「勧請」を行なって「開経偈」へと続く。結婚式では出席者着席の後「開式宣言」があり、「初樂」・「道場偈」・「三宝礼」の後、「勧請」（在家勤行式の「奉請」と同文）がなされて以下へ進む。

浄土宗は、当然ながらほとんどの儀式に「奉請」が行なわれる。これには、

奉請弥陀世尊入道場

奉請釈迦如来入道場

奉請十方如来入道場

と弥陀世尊・釈迦如来・十方如来を迎える「三奉請」と、

奉請十方如来 入道場散華樂

奉請釈迦如来 入道場散華樂

奉請弥陀如来 入道場散華樂

奉請観音勢至諸大菩薩 入道場散華樂

と十方如来・釈迦如来・弥陀如来・観音勢至諸大菩薩を迎える「四奉請」があり、このいずれかを行なう。

時宗も、ほとんどの儀式の冒頭に「四奉請」（浄土宗と同文）を行なう。

真宗大谷派では、年忌法要の際、

先請弥陀入道場

不違弘願応時迎

観音勢至塵沙衆

従仏乗華来入会

の偈を唱える。

以上のように、現在、法事を修する際に奉請を行なうのをいくつか見出すことができる。このことは、決して近時奉請を行なうようになったのではないこと、もちろんである。しかるべく伝統の上に立って今日にその作法を残しているのであって、つまり、法事を修する際に、まず、弥陀や釈迦をはじめ、諸仏諸菩薩等を奉請することは、平安朝をはじめ長明の当時においてもなされていたであろうことは、決定的外れな推測ではないといえよう。

四

何かの行事を行なう際に、霊をその場所へ呼び迎えることは、仏教上の法事に限ったことではない。

例えば「神楽」の語源は「神坐^{かみくら}」だといわれる。神楽は、まず採物と称する短剣などを手にして舞い、その採物を安置した後、本格的に神楽の舞へと進むが、その採物を安置する場所が「神坐^{かみくら}」である。ということは、採物に神が宿ったことを意味する。すなわち、まず神の霊を迎えることが冒頭に行なわれるのである。

『平家物語』の成立について記したものに『徒然草』第二二六段がある。信濃前司行長や生仏・慈鎮和尚の名前の真偽はともかくも、『徒然草』の記事は、慈鎮のような人物が、扶持していた行長や生仏のような人物に『平家物語』を作らせたと広く受けとられていたということ物語っている。何のために慈鎮は『平家物語』を作らせたのか。源平の争乱において死んでいった人々の鎮魂のために大藏院を建立した慈鎮は、平家の人々の鎮魂のために『平家物語』を作らせたのである。慈鎮と限定はできないが、そのような人物によって、そのような意図をもって『平家物語』が作られたことを『徒然草』当時には受けとられていたということである。これは渡辺貞麿先生の御教示によるが、私もそう考える。では、なぜ『平家物語』を語ることが、平家の人々への鎮魂になるのか。渡辺先生の御教示によれば、前述した神楽において、採物を手にして舞うのは、神のしぐさをまねるのであり、それによって採物に神が降臨するのであり、『日本書記』にみられる、いわゆる海幸彦、山幸彦の話において、弟にこらしめられた山幸彦が弟のまもりとならんとするのに、そのしわざをまねるといふこと等から、生前の姿をまねたり語

ったりすることによってその人の霊を呼び迎えることができるのである。『平家物語』において、死んでいった平家一門の人々の生前の行ないを語ることは、平家の人々の霊を呼び迎えることになるのである。そうして迎えた霊に対して読経などの供養を行なうことによって鎮魂が成立するのである。『看聞御記』をみれば、三回忌や七回忌の法要の際に『平家物語』が語られ、その後読経がなされた記事を見出すことができる。『耳なし芳一』で平家の武将たちが現われたのも、全く根拠がないわけではないのである。⁽⁸⁾

つまり、まず供養する対象を奉請することは仏教の儀式においてはもちろん、広くそういった考え方があったといえよう。

五

長明も当然のことながら、仏教の法事を修する際の作法を知っていたことはまちがいあるまい。しかし、自らに問いつめた結果、何とも答えることができなくなった長明は、もはやどうしようもなく、念仏を唱えるしかなかった。とても、奉請を行なうような余裕はない。奉請を行なわねばならぬことは承知しているけれども、切迫した長明はそれを行なうゆとりがない。奉請を行なわない「不請の阿弥陀仏」を唱えるしかなかったのである。

しかも、長明が今いる場所は方丈の庵である。そこには、「阿弥陀の絵像を安置し、そばに普賢をかけ」ている。路傍や野原ではないのである。路傍や野原では、「奉請」の作法もなしに念仏を唱えることもあろう。しかし、今は眼前に阿弥陀仏の絵像があるのである。阿弥陀仏の絵像に向かいあっているのである。普段ならば「奉請」をし

てから念仏を修するのである。それが、自問自答の結果、どうしようもなく追いつめられた長明は、「奉請」の作法を行なう暇はなかった。もう、ただただ念仏を唱えなくてはいてもたってもおれなかったのである。

結

無常の理を説き、無常の実例を挙げ、そういう煩しい俗世を離れた閑居の生活こそが精神的自由を満喫できるものであることを得々として述べ、「住まずして、誰かさたらん。」とまで言い切った『方丈記』は、その名文とともに構成の整った見事な作品となった。しかし、次の瞬間に長明を襲った思ひは、余命いくばくもない自分が草庵に固執していることへの反省である。いや、反省などといった生易しいものではない。閑寂に執着して仏の教えに背いている自分への詰問である。出家し、草庵に住するのは仏道修行のためでなかったのか。自ら問いつめた結果、長明は答えることができなくなってしまった。どうしようもなく追いつめられた長明は、うめくように、救いを求めるようにして念仏を唱えるしかなかった。その苦しさは、前段まで見事な構成・論理をもって述べてきた、その全てを否定しざることを敢てせざるをえなかったほどである。ここに至って『方丈記』の構成は崩れ去ってしまったが、しかし、長明は、それでも記さずにはおれなかったのである。この点から、この末尾の部分が最初から予定されていたものであるという捉え方には従いがたい。私は、「住まずして、誰かさたらん。」と高らかに語ったその次の瞬間に長明の心起った苦惱を卒直に語ったものであると考えるのである。

自ら問い詰め、どうしようもなくなった長明は、ただただ念仏を唱えて仏に救いを求めるしかなかった。とても

「奉請」の儀式を整える暇などない。「不請の阿弥陀仏」を兩三遍唱えるしかなかったのである。最後の「やみぬ」という言葉に、長明の何ともいいようのない苦しい思いがにじみ出ているように思えてならない。あれほど文才にすぐれた長明が黙ってしまいうかない苦しみ、それを「やみぬ」と書くしかなかった長明。最後に「時に、建暦の二年、弥生のつごもりごろ、桑門の蓮胤、外山の庵にして、これを記す。」と形式に従って書き入れる長明の苦渋は、思いやっても余りがある。

つまり、自らを問ひ正していった結果、どうしようもないところへ追いつめられた長明は、奉請の儀礼を整える暇などなく、ただただ念仏を唱えるしかなかった。救われるかどうかなどわからないが、しかし、念仏を唱えるしかなかったのである。

以上、『方丈記』の「不請の阿弥陀仏」の「不請」の解釈について、「不奉請」と捉えるべきことを述べてきた。しかし、「請仏の儀式を修し、形式的に請仏することは自分をいつわることであるから、どうしても『奉請』の儀式をととのえることができなかった⁽⁹⁾」たのでもなく、「長明は、仮に阿弥陀仏を請じ奉ることが儀礼としてできる財力や社会的地位をもっていても、到底、請じ奉るに堪えない、心に恥ずる所があった⁽¹⁰⁾」のでもないと考えられる。また、築瀬一雄氏がいわれる「長明はそれ（＝請仏の儀礼）をさえもとのえる暇を惜しんで、阿弥陀にすがらざるをえなかった自己を述べているものと思うのである。」といわれるのには、私も同感であるが、「弥陀への帰依という一道の光明を見いでた感動をもって筆をおいた⁽¹¹⁾」と捉えられるのには賛同しがたい。そこまで長明は至ったであろうか。

自らに問いつめられた長明が、どうしようもなくなった時、他に何の手だてもない状況の中で、ただただ念仏を唱えるしかなかった。そこには、長明の深い苦渋がにじみ出ている。絶望したのでもないが、また救いを見出したのでもない。自問自答の結果、どうしようもなくなった苦しい長明の思いを私は感ずるのである。

長明の苦悩の告白は『方丈記』の構成を崩すものであり、「住まずして、誰かさたらん」までを全て否定するものである。しかし、そこには人間長明の苦悩が素直に出ており、それゆえに、『方丈記』が我々の胸を打つのである。文学としての高い評価を持つのであると考えるのである。

注

- (1) 『方丈記』の引用は築瀬一雄氏訳注の『方丈記』（角川文庫）による。以下同じ。
- (2) 山田昭全氏「『不請阿弥陀仏』私見」（日本文学研究資料叢書『方丈記・徒然草』所収・九一頁。初出は『古典の諸相』富倉徳次郎博士古稀記念論文集・昭和四四年一月発行）
- (3) 「『方丈記』の『不請の阿弥陀仏』考」（『解釈』昭和三九年三月号所収）・「再び『方丈記』の『不請の阿弥陀仏』について」（『下関商業高等学校創立八十周年記念論叢』昭和三十九年十月／＼所収）
- (4) 『方丈記解釈大成』（昭和四七年六月・大修館書店）二五三頁～二五七頁。
- (5) (2)に同じ。
- (6) 真宗聖教全書一『三経七祖部』五六二～五六三頁。
- (7) 玉置鞆晃氏「法事讃」（真宗聖典講義全集第三卷『三経七祖之下』所収）三四七頁。
- (8) この節は、論中にも断ったが、渡辺貞麿先生の御教示によるところが多い。改めて一言しておく。渡辺先生「仏前で『平家』を語るといふこと」（『真宗教学研究』第9号／＼昭和六〇年十一月・真宗同学会／＼所収）参照。

- (9) (2)に同じ。
- (10) 神田秀夫氏（『解釈と鑑賞』昭和四十年一月号）
- (11) 築瀬一雄氏『方丈記全注釈』（角川書店・昭和四十六年八月／昭和五三年六月四版による）二七九頁。